

地域資源の編集を通じたエンパワーメント —大阪・上町台地界隈での実践から



大阪ガス株式会社エネルギー・
文化研究所 特任研究員

弘本由香里

はじめに—コミュニティ・エンパワーメント が求められる背景

少子高齢化、人口減少とともに単独世帯（一人暮らし世帯）のマジョリティ化が加速している。2015年の国勢調査で全国の一般世帯に占める単独世帯の割合は34.6%に達し、2010年の同調査以来、単独世帯が夫婦と子供から成る世帯を抜いて、もっとも多い家族類型となっている。都市部ではその割合がさらに高く、大阪市では単独世帯が48.7%を占めている。

単独世帯のマジョリティ化は、社会制度の立て直しを迫っているが、問題は人口や高齢者や単独世帯の数や社会保障の額だけではない。むしろ、戦後の高度経済成長を、大都市圏への労働力の集中という形で支えてきた、社会の仕組みや家族や暮らしのあり方そのものが軋んでいると考えるべきだろう。

いわゆるサラリーマンの核家族は、世代間で生業を継承する必然性がなく、日本では勤務地の流動性も高い。結果として、地域との関わりが乏しいまま、世帯分離や離別・死別を経て、単独世帯化していく。自営業でも、生業が継承されなければ、同様に単独世帯化が進む。地域のソーシャル・キャピタルは、地域に根差した生業の担い手の力によって維持されてきた側面が強い。つまり、地域の生業の衰退は、地域経済の低迷のみならず、かろうじて地域の秩序を守ってきた、規範の喪

失に直結する問題をも内包していることに目を向ける必要がある。

大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所（以下、CELという）では、2005年から2016年にかけて、全国の20歳代～60歳代の男女1000人～5000人程度を対象に、12回に渡るネット・アンケート調査を行っている。その結果からも、生活者の漠とした不安が浮かび上がってきている。気になるのは、地域・社会の中で助け合うことや、弱者に対する配慮などの公共的な意識が減退傾向にあり、エゴイスト、後ろ向きなどのネガティブな自己像が増加傾向にあることだ。

アンケート結果がすべてを表しているわけではないが、生活者の多くが将来に渡って、地域・社会とのつながりを実感できず、自尊心を育むこともできず、他者への共感性を失ってしまったとしたら、暗澹たる世界が広がってしまう。

新たな規範の共有へ—上町台地界隈での フィールド・トライアル

企業をはじめ特定の集団を介して規範を共有し、地域・社会につながるスタイルから、物理的な距離や境界を超えて、個人個人が直接つながるスタイルへ、コミュニケーションや人間関係のあり方も大きく変化している。そのような社会環境のなかで引き起こされやすい、異文化・階層の衝突やコミュニケーショ

ンの断絶・孤立を防ぎ、格差を緩和し、ウェルビーイングを支えるために、人と人、人とまちの交わりを豊かにするコミュニティ・デザインのあり方が切実に求められていると、いってよいだろう。コミュニティの最前線の変化をリアルに捉え、過去・現在・未来をつなぎ、異なる世代や多様なルーツ、新旧住民や地域内外の交わりを再構築する、コミュニケーション・ツールや場づくりの重要性が増している。

こうした問題意識のもと、筆者はCELにおける、コミュニティ・デザイン研究の一環として、大阪・上町台地界隈をフィールドに、身近な暮らしの現場にあって、異なる者の関係性を媒介する際の、緩衝材やブリッジやフィルターや吸引力となる、地域資源(地域の特性を物語る、自然、建築・街並み、生業、産物、人・組織、祭事、風習など)の価値に着目。集合的な記憶や創造的規範の共有を可能にしていくためのコミュニケーション・ツールや場のあり方について、CELと地域の方々々が緩やかに連携しながら、具体的なトライアルを展開しているのが、U-CoRoプロジェクト⁽¹⁾である。

第1ステップ(2007年～2012年)では、上町台地に立地する大阪ガス実験集合住宅NEXT21の1階にウィンドウ展示コーナーを設け、地域の物語としてのコンテンツを、地域の方々とともに創り上げ、伝えていくプロセスを通して、人々の交流を促し、新たな関係性を紡いでいく実践を重ねた。波及効果として、地域の幅広いまちづくり活動の中に、防災・減災への取り組みをはじめ、新たな気づきやネットワークを活かした実践が連鎖的に生まれていく動きが見られた。

第2ステップ(2013年～)では、第1ステップで築いた関係性を基盤に、地域の方々の記憶・体験と埋もれている資料等を重ね合わせ、地

域の過去・現在・未来をつなぐコンテキストを捉え直す試みを行っている。ミクロな紙媒体「上町台地今昔タイムズ」を発行するとともに、フォーラムを通じて世代や立場や分野を超え、地域の暮らしのあり方や課題の把握、課題解決の知恵を共有するための基礎となる、顔の見えるコミュニケーション・ツールと場づくりに取り組んでいる。

関係性を媒介するー上町台地界隈の特性と地域資源の集積

第1ステップ、第2ステップの取り組みを簡単に紹介する前に、フィールドとしての上町台地界隈の特性の一端に触れておく。上町台地は、地形的にも歴史的にも大阪の背骨というべき場所である。大阪城付近を北端に、大阪市内中心部を南北に貫く洪積台地で、古くは海の中に突き出した半島状の陸地だった。地政学的に内外を結ぶ政治・経済の拠点として、古代には四天王寺や難波宮が、中世から近世にかけては本願寺や大坂城、寺町が築かれるなど、日本史を象徴する資源が存在している。また、近現代に入ると、多くの学校や医療施設が集積し、都心居住の人気の高いエリアである。大阪ガスの実験集合住宅NEXT21も、この台地の中心部に立地している。

一方で、高齢化や世帯の小規模化、マンション居住者の急増などを背景に、潜在する居住者の孤立化や、災害リスクの広がり、地域自治活動の担い手のひっ迫、伝統的な行事等の継承の難しさなど、他地域と共通する課題の数々も浮かび上がってきている。

同時に並行して、多様な地域資源を再生・活用する動きも見られる。たとえば、空堀界隈に集積する戦災を免れた長屋等の再生、玉造界隈の伝統野菜・玉造黒門越瓜(しろうり)の復興、寺院や神社を舞台にした文化活動や

コミュニティ・サポート、新たなまつりの数々も生まれている。また、コアタウンでの多文化共生の取り組みや、学習支援をはじめ多彩な人的交流も見られる(図1)。

こうした地域資源の再生・活用プロジェクトは、「歴史につながる生活実感の共有」「まちに住む文化の発展的な継承」「個人と社会を結ぶ共の場の形成」「風土に根ざす生活文化の再評価」「多様な文化・価値観の受容と共生」といった新たな価値の源泉となる。つまり、過去と現在、新と旧、自己と他者、ホームとアウェイといった対照関係にあるものの交わりを促進し、多少のコンフリクトを生じながらも、長期的には地域に潜在する課題の気づきや解決への力を涵養する可能性を宿している。

U-CoRoプロジェクトは、上町台地に集積する地域資源と、潜在する課題、再生・活用の動きを総合的な視野の中でとらえ、編集機

能を担うことによって、コミュニティ・エンパワーメントへの貢献を目指す取り組みともいえる。

U-CoRo プロジェクト第1ステップが開いた回路

U-CoRoプロジェクト第1ステップの手法はいたってシンプルである。4つの基本テーマ、①地域文化の再発見、②多世代・多文化共生、③防災・減災文化の創造、④自然・環境の再生を軸にコンテンツを構成し、ウィンドウ展示と関連するワークショップや交流イベント等のプログラムを展開する。この、地域の物語としてのコンテンツへの関わりを、人と人、人と地域のつながりを育むプロセスとしていく(図2)。

2007年から2012年の5年間に、「まつり」「子どもと遊び」「いのちをまもる智恵」「伝統野菜」「コミュニティグリーン」「ものづくり」「水

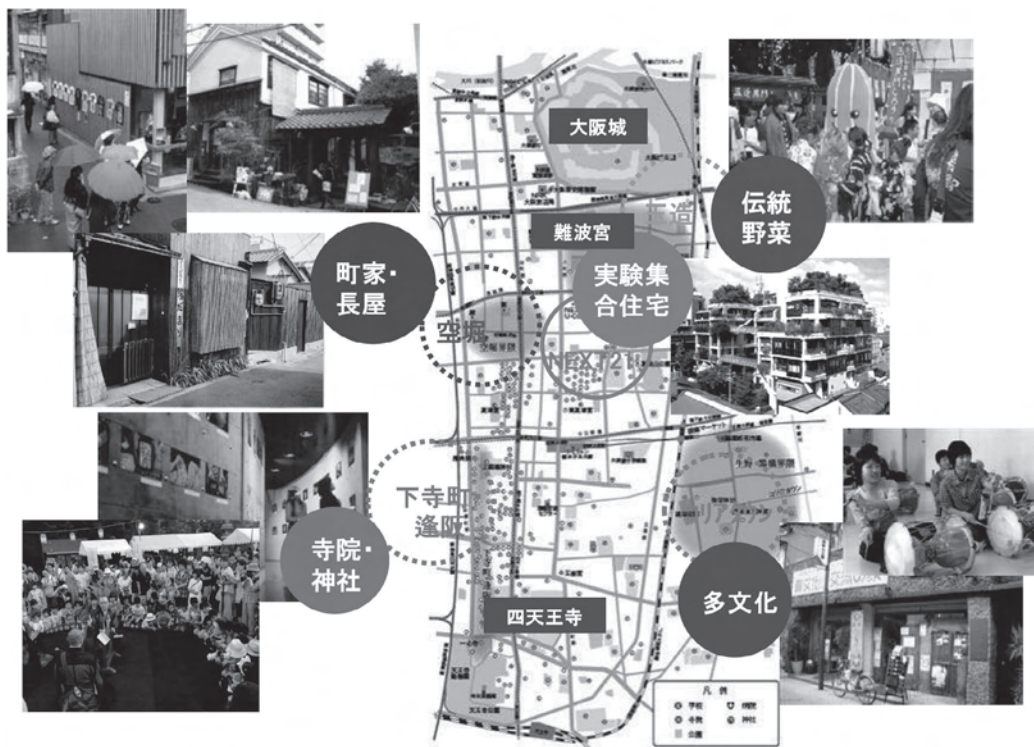


図1 上町台地界隈に集積する資源と再生・活用の例等



図2 U-CoRoプロジェクト第1ステップ ウィンドウから新たなつながりを育む



図3 U-CoRoプロジェクト第1ステップ 地域資源を編集するコンテンツの展開

の縁」など、15の物語としてのコンテンツを地域の方々とともに展開した(図3)。

たとえば、第1回の「上町台地まつり絵巻」では、新住民がまちの歴史・文化に触れる入り口として、春夏秋冬のまつりを絵巻のように紹介し、関係者の交流の機会もつくった(図4)。第2回の「上町台地 子どもと遊び いま・むかし」では、3世代の居住者の子ども時代の遊び場を調査しマップに表現し、子どもたちとまちの交わりの大切さを考え伝える機会にしている。

また、命に関わる事柄でありながら、日常生活の中で置き去りにされがちな「防災・減災」を、いかに身近なものにしていくかという問題意識から、「防災・減災文化の創造」に関わるコンテンツを、一連のコンテンツの中に埋め込んでいる。第3回の「『いのちをまもる智慧』を伝える 減災に挑む30の風景と上町台地災害史」、第6回の「減災ゲームで気づく上町台地の暮らしいろいろ」、第9回の「“減災キャラバンon上町台地”の道程から」、第

12回の「上町台地 もしも・いつもの“避難所”ウォッチング」である。

15回までの展示内容等の詳細は、ホームページでアーカイブとして公開しているので、そちらを参照いただきたい⁽¹⁾。

第1ステップの実践を通じて、いくつかの可能性が見えてきた。コンテンツ提供への能動的な関わりを可能にするテーマ設定によって、地域に対する関心の幅が広がり、プレイヤーそれぞれの属性の枠を超えた重層的な交流や活動の兆しが見えてくること。また、潜在する地域課題に対して、地域外の専門家等のまなざしを得ることによって、自らの暮らしと地域への問いが立ち上がり、地域資源に根差した創造的な問題解決と価値創造の回路が育まれていくこと。個々の経験を共有できる仕掛けを介したネットワークの実感が、地域に暮らす実感にもつながっていくことなどがうかがえた。

個人化や多文化化が進む社会にあって、多様な価値観を受容しながら地域への愛着を育

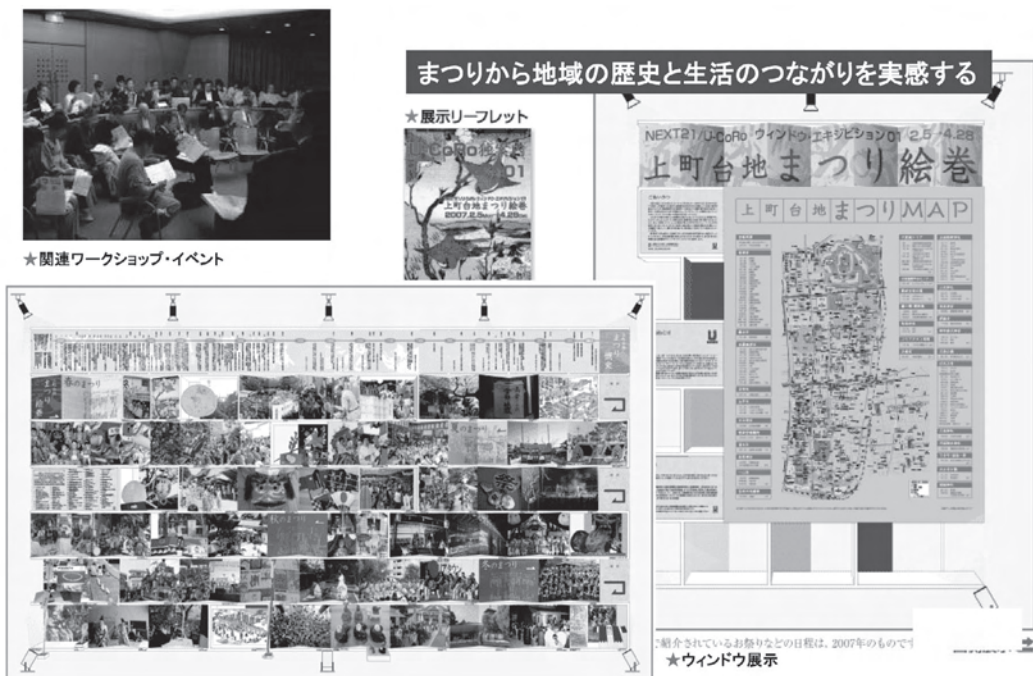


図4 U-CoRoプロジェクト第1ステップ ウィンドウ・エキジビション01「上町台地まつり絵巻」

むまちづくりが求められている。地域資源を活かし、多様な主体の交流を促し、新たな関係性を築き上げていく実践から、地域の暮らしを持続的に支えていくための、ソーシャル・キャピタルのありようを展望することができる。

U-CoRo プロジェクト第2ステップの深化・拡張

U-CoRoプロジェクト第1ステップで開いた回路、築いたネットワークを糧として、U-CoRoプロジェクト第2ステップは、NEXT21からまちなかへ、ミクロな発信場所の多極化・分散化を図ると同時に、価値や規範の発展的な継承のために、地域文化の耕しの深化を試みている。それを可能にするツールとして、街角のミクロな紙媒体「上町台地今昔タイムズ」を発行。大量にばらまくのではなく、手から手へ、顔の見える関係で伝えていくスタイルをとり、発行の趣旨を次のように掲げている。

くわたしたちが暮らす“上町台地”。古代から今日まで絶えることなく、人々の営みが刻まれています。天災や政変や戦災も、著しい都市化も経験しました。時をさかのぼってみると、まちと暮らしの骨格が浮かび上がってきます。自然の恵みとリスクのとらえ方、人とまちの交わり方、次世代への伝え方…。過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに、U-CoRoプロジェクト第2ステップでは、壁新聞「上町台地今昔タイムズ」を制作いたします。> 地域の方々や図書館・博物館等の協力を得て、貴重な資料やコメントを提供していただき、身近な暮らしの中にある歴史を共有し、地域の将来につながる種としてく試みでもある。

なぜ、地域の過去・現在・未来をつなぐコンテキストを捉え直す試みを行っているのか

といえば、地域の価値や課題を認識するためには、まずそれがどのような歴史的背景や経緯をたどって生まれ、現在の状況があるのかを理解する必要があるからだ。連続的な視野の中で地域と自らの立ち位置を認識できたときに、はじめて本質的な意味で価値の発展的な継承や課題解決の方向性を見出し、未来を展望することが可能になる。

こうした考えのもとに、2013年秋から半年に1回のペースで発行する「上町台地 今昔タイムズ」を核に、地域資源の掘り起しと巻き込みの重層化を意図して、4段階の取り組みを展開している。①「上町台地 今昔タイムズ」による、過去・現在・未来、暮らし(記憶・体験)と歴史資料の接続、②「上町台地今昔フォーラム」による、ネットワークの形成と情報共有の場づくり、③「上町台地 今昔フォーラム ドキュメント」による、資料・証言・知見の記録と社会へのフィードバック、④地野菜・玉造黒門越瓜(しろうり)“ツルつなぎ”プロジェクトによる、しろうりの栽培としらうり料理の集いを通した生活文化の醸成と顔の見える関係づくり。①から③はセットで展開し、④は①～③に通底する水脈のような基盤としての役割を果たしている。

「上町台地 今昔タイムズ」ー過去・現在・未来を接続する

「上町台地 今昔タイムズ」第1号(2013年秋・冬号)から第10号(2017年秋・冬号)のテーマと狙いは、以下のとおりである。

第1号「鉄道史から垣間見える、近現代・大阪での都市拡大」では、近代の鉄道網の発達とともに、急激に進んだ都市の拡大は、地域をどう変えていったのかに迫った。マクロな都市化の視点とミクロな生活実感の視点を接続し、果てしなく拡張していった市街地の変遷のプロセスをリアルな経験として共有す

ることを目指した。

第2号「浪花の町衆が親しんできた 近郊の豊かな自然と雄大な景観」では、都市と農村の機能分担と濃密なネットワークによって成り立っていた近世・近代のコスモロジーを、当時の行楽地・景勝地の位置をたどりながら明らかにした。

第3号「なじみ・行きつけ・御用達 百貨店・商店街との思い出から垣間見る 暮らしとつながりの変化」では、まちなかの百貨店・商店街も、人と人、人と地域の文化をつなぐ場であったことを、まちなか暮らしと買い物にまつわる数々の証言から描き出した。

第4号「文画人・楳次郎が見つめた大阪上町台地をかたどった水辺の風景と土地の記憶」では、大正から昭和初期にかけて、豊かな田園風景が住宅と工場が建ち並ぶまちへと変貌を遂げていった「大大阪」時代、その記録に努めた楳次郎の作品世界にスポットを当

て、人口減少期に入った都市の未来に改めて思いを馳せた(図5)。

第5号「思い出の映画館と身近なまちの戦前・戦後」では、「大大阪」時代、空前の市街地開発と賑わいの前線で、暮らしのすぐそばに、欠かせない娯楽の場・映画館が開かれていった様子に迫った。身近なまちの映画館の盛衰をたどり、埋もれていた資料を掘り起し、戦前・戦後の失われかけた地域の生活史に光を当てた。

第6号「昔も今もなにわ名物「玉造黒門越瓜(しろうり)」物語」では、2002年に玉造の地に戻ってきた、地野菜・玉造黒門越瓜の縁起をさかのぼり、豊臣期大坂から徳川期大坂への政権交代による土地利用の変化や、奈良・伊勢への出入り口に位置する地の利が生んだドラマに迫り、食と農と暮らしのこれからを展望した。

第7号「伝説の生玉人形とたどる ものづ

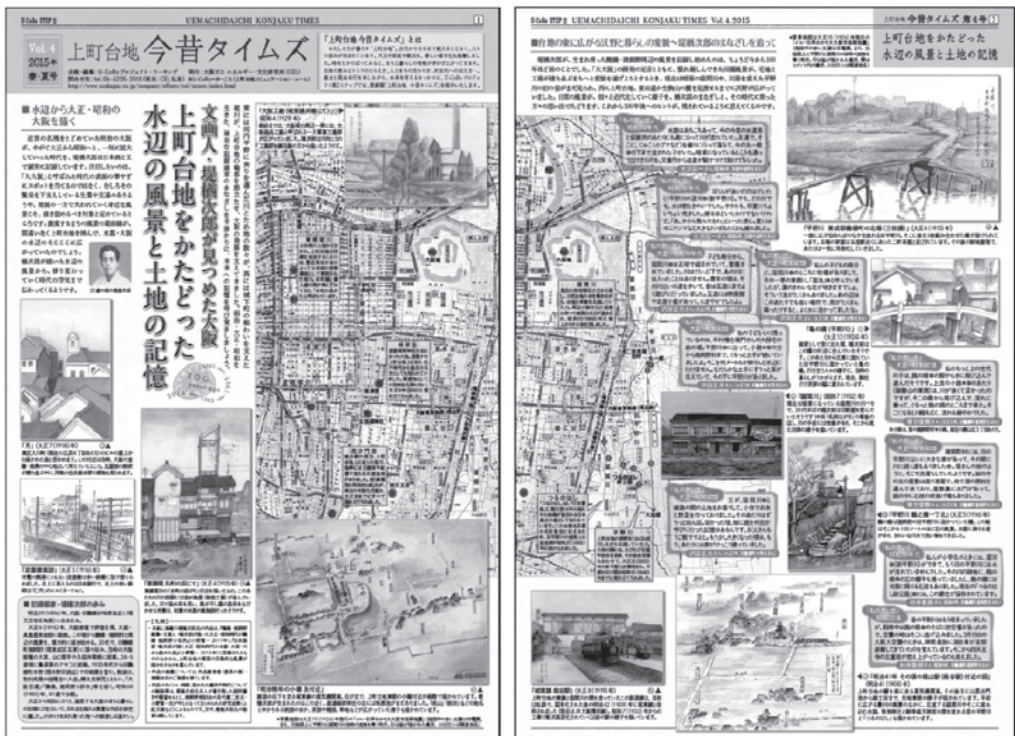


図5 U-CoRoプロジェクト第2ステップ「上町台地 今昔タイムズ」第4号 楳次郎の絵画を手掛かりに未来への記憶を呼び覚ます

くりと文化の原風景」では、上町台地で今につながるものづくりの源流から、芸能とものづくりの申し子ともいべき「生玉人形」をはじめ、郷土玩具の数々を生んだ風土に、創造都市・大阪の原風景を見出した(図6)。

第8号「有為転変、世情に寄り添い願いを映し よみがえるお地蔵さんとまちの暮らの縁起」では、お地蔵さんの習俗・文化をたどり、幾多の時代の荒波を被りながらよみがえり続ける姿を追い、コミュニティのレジリエンスにつながる知恵に迫った。

第9号「はじめは上町台地“知”を運ぶ 本のまち・大阪の軌跡をたどる」では、古代・世界に開かれた最先端の“知”の港に始まり、近世・近代には時代に先駆けた“知”の開拓者や媒体を生み出したまち・大阪を振り返り、その原点・上町台地からこれからのありようを問うている。

「上町台地 今昔タイムズ」のバックナン

バー及び連動して開催している「上町台地 今昔フォーラム」のドキュメントレポート等は、すべてホームページで公開しているの、内容の詳細についてはそちらを参照いただきたい⁽¹⁾。

相乗効果—「上町台地 今昔タイムズ」×「上町台地 今昔フォーラム」

「上町台地 今昔タイムズ」による、過去・現在・未来、暮らし(記憶・体験)と歴史資料の接続と、「上町台地 今昔フォーラム」による、ネットワークの形成と情報共有の場づくりが、組み合わせられることによってどのような状況を生んでいるか、第8号「有為転変、世情に寄り添い願いを映し よみがえるお地蔵さんとまちの暮らの縁起」を一例に簡単に紹介しておこう(図7)。

まず、「上町台地 今昔タイムズ」第8号の紙面では、表面で過去に学ぶ視点の掘り起

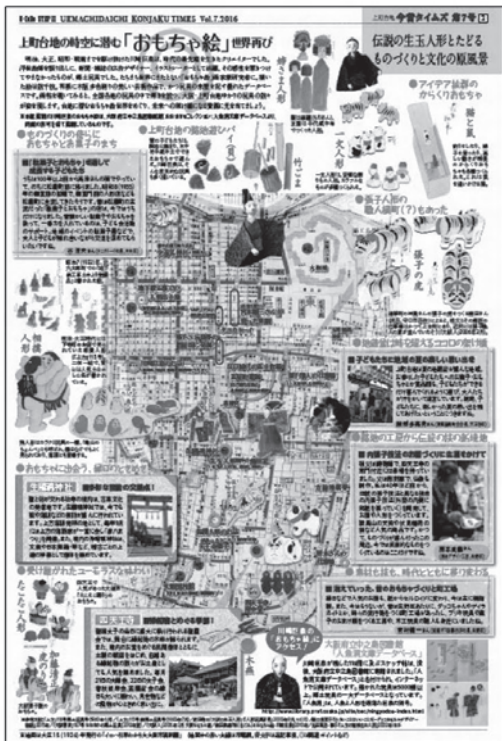


図6 U-CoRoプロジェクト第2ステップ 「上町台地 今昔タイムズ」第7号 伝説の郷土玩具に導かれ、創造都市・大阪の原風景に会おう



図7 U-CoRoプロジェクト第2ステップ「上町台地 今昔タイムズ」第8号
人の世とともに移り変わり生き続けるお地蔵さんにコミュニティの知恵を探る

しとして、古代以来、幾多の時代の試練を受けながら、人々の願いとともによみがえり続けるお地蔵さんとコミュニティの関係性の習俗・文化を描き出している。裏面は最前線の実践へのリーチとして、コミュニティにおける新たな人々のつながりのあり方を模索して息を吹き返す、現代のまちなかの地藏盆(地藏祭)の取り組みの数々を紹介している。

連動して開催した「上町台地 今昔フォーラム」第8回は、大阪民俗学研究会・田野登代表が、歴史資料と現場の両面からお地蔵さんをめぐる歴史・民俗とコミュニティの関係を丹念に読み解かれ、続いて空堀界隈の活性化に取り組む、からほり倶楽部・渡辺尚見理事が、まちづくりの観点から、マンション住民の急増で激しく賑わう地藏盆の近況と、おしかける訪問者への対応に窮する場面もある路地コミュニティの最前線をレポート。さら

に、紙面の取材に協力いただいた関係者から、人々の暮らしやコミュニティの実相を受け止めて、お地蔵さんを活かして新たなコミュニティの関係づくりに挑戦している様子が伝えられた。

また、地域住民、NPO、行政、関連分野の研究者、まちづくり関係者、マスメディア・地域メディア関係者等、幅広い世代、多様な立場・分野の方々が、関連情報を持ち寄られた。高齢化による地藏盆の継続の厳しさが語られる一方で、フリーライドから一歩踏み出したいという若手の意思表示もあれば、お地蔵さんに刻まれた地域の災害履歴の発見や、小学校との連携による調査事例等も報告された。地域のお地蔵さんが多世代をつなぎ、新旧住民の架け橋となっている例も多数紹介され、少子高齢化の現実のなかで、コミュニティの知恵を共有する、貴重な情報交換の場

となったとの感想も寄せられた。歴史・民俗のナレッジとまちづくりの現場の担い手の思い、さらに担い手予備軍をつなぎ、課題解決の力を育むブリッジングが行われたと見てもよいだろう。

フォーラムの場に持ち寄られた資料・証言・知見の数々は、記録し「上町台地 今昔フォーラムドキュメント・レポートvol.8」にまとめ、他地域でも活かせるように、広く社会へのフィードバックを行っている(図8)。

まとめにかえて—ネットワーク型規範の共創・エンパワーメントの鍵

「上町台地 今昔タイムズ」と「上町台地 今昔フォーラム」の連動に、通底する水脈のような基盤としての役割を果たしているのが、「玉造黒門越瓜(しろうり)“ツルつなぎ”プロジェクト」である。都市の中で忘れられがちな

自然の循環を思い起こし、身体化し、持続・発展させていく、生活文化の苗床の機能を担っている。しろうりを栽培し、しろうり料理を味わう、顔の見える関係を中心とした、ささやかな取り組みだが、参加者の顔ぶれは地域・社会の状況を映し出して変化する。2017年夏に開催した集いには、みごとなしろうり料理の数々が持ち寄られたが、例年栽培に参加される方々・地元関係者とともに、横断的な地域福祉・文化活動の担い手(高齢者サロン・子ども食堂等)、環境教育NPO関係者、農業ビジネス研究グループ、農業実践者、食と健康分野や伝統野菜の研究者、地域資源を活かしたビジネスの担い手(食・建築等)、地域の行政関係者等、地域・社会のニーズに敏感な職能を持つ方々が参加された。ここでの出会いから、新たな活動へのつながりも生まれている。季節の生活文化として、苗



図8 U-CoRoプロジェクト第2ステップ「上町台地 今昔フォーラム」第8回「大阪のお地蔵さん」を媒介に、持ち寄られた知見・知恵の数々を収録しフィードバック

床としてのネットワークを耕し続けることによって、社会課題の認識と課題解決の新たなビジョンが芽生え、生活行動を誘っている様子がうかがえる(図9)。

U-CoRoプロジェクト第1ステップを礎に、U-CoRoプロジェクト第2ステップでは、地域資源の編集機能をより深化・拡張させてきた。一連の実践を通して、コミュニティのあり方を組み直す、ネットワーク型規範の共創・エンパワーメントの鍵として、次の4点を挙げておきたい。①過去に学ぶ視点の掘り起しと、最前線の動きを一連のコンテキストで捉え直し、関係性を可視化する(課題の認識)、②一つの課題に対して、関係する多様な分野・立場の存在を顕在化させ、新たな価値を生む交わりの場づくり・ブリッジングを行う(価値の創造)、③課題解決の新たなビジョンを開き、行動へ誘うための、生活文化の苗床となるネットワークを耕し続ける(持続可能性)、

④モノ・コト・地域の背景にある物語の再構築によって、意識と行動の変容を促し、創造と発信の連鎖を生む(再起動)。

高度経済成長期に、職・住を切り分けた社会システムやまちづくりから、再び住まいと生業、人と人、人とまちの関係のあり方を複合的に組み直していく時代を迎えている。地域創生の前提に、世代や立場や分野を超えて、地域の過去から現在・未来を連続的に捉える実践的なアプローチが欠かせない。それはあらゆるエンパワーメントの起点になるはずだ。

注記

(1) U-CoRoプロジェクト(第1ステップ及び第2ステップ)は、大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所が主催し、U-CoRoプロジェクト・ワーキングが企画・編集に当たっている。プロジェクトの詳細、発行物等はホームページで公開している。

<http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html>



図9 U-CoRoプロジェクト第2ステップ 「2017年 玉造黒門越瓜“ツルつなぎ”収穫祭!」
夏恒例となった行事から、新たな価値の発見と縁の広がりが